

## 中国人フランス文学者・盛澄華のジッド宛未刊書簡

吉井，亮雄  
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7329806>

---

出版情報：Stella. 43, pp.59-92, 2024-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



# 中国人フランス文学者・盛澄華のジッド宛未刊書簡

吉 井 亮 雄

すでに筆者はジッドが40歳以上も年下の中国人フランス文学者・<sup>ジョンチョンファ</sup>盛澄華に宛てた書簡15通を、名宛人自身による中国語訳（1948年刊の著書『紀徳研究』に収載）からの日本語重訳で公表している<sup>1)</sup>。そのさいかなり詳細な補説と註を添えて両者の交流の具体相を紹介したが、あくまで往復書簡の提示ではないだけに、記述の細部についてはいくつか不明な点が残らざるを得なかった。だが最近になってバリのカトリーヌ・ジッド財団が収蔵する盛澄華のジッド宛13通を閲覧・参照しえたことで、ふたりの書簡交流のほぼ全容を把握するに至ったのである<sup>2)</sup>。本稿では、必要に応じて前稿掲載分の情報に言及しながら当該書簡群の全訳を提示することにしたい（なお書簡はいずれもフランス語で書かれ、ときに綴り字や文法・語法の誤りは認められるものの、総体的に見て意思疎通はなんら支障なく行われている）。

まずは差出人の経歴を手短に確認しておこう——。盛澄華は1912年、浙江省杭州市蕭山区の生まれ。同区や紹興市・上海市で初等・中等教育を、復旦大学外文系・清華大学外文系で高等教育を受けた。1935年に清華大学を卒業、その後パリ大学文学部に留学。彼の地では学位の取得よりは、むしろフランス文化全般に親しみながら実地での文学研究を優先した。言うまでもなくジッドとの親交がその最大の成果である。また留学中の一時期、イギリスのエディンバラ大学で英文学を学んでいる。39年11月、4年間の留学を終え中国に帰国。翌年、陝西省城固県の西北大学に副教授として着任。43年に復旦大学外文系教授、47年には母校・清華大学外文系の教授となる。国共内戦も終盤の49年3月、人民解放軍に率先志願、第4野戦軍南下工作団に配属されるも、半年後には肺を患い治療のため北京に戻っている。翌50年、清華大学外文系に主任として復帰、52年には全国高等院校の改編にともない北京大学西語系教授に転任、と若くして着実にキャリアを重ねた。その間、中国作家協会に属し多くの著述を発表したが、ジッドにかんしては前出『紀徳研究』を纏める一方、後述するように43

年から『地の糧』『贖金つかい』『ジュヌヴィエーヴ』を翻訳・出版、また47-48年には『文学的回想と現今の問題』『架空会見記』を訳して紙誌掲載。さらに委細は不明ながら『ユリアンの旅』や『オスカー・ワイルド』の中国語訳も物し  
たらしい。しかしながら「社会主義の叛徒」とされた作家を専門としたことが  
とりわけ裏目に出、平穩な学究生活を全うすることはかなわなかった。1969年、  
北京大学の一員として江西省の鯉魚洲農場へ下放され、過酷な労働に従事。そ  
れがたたって翌年9月、突発性の心筋梗塞により同農場で没した。享年57。

＊

パリ留学2年目の大晦日、盛澄華が意を決してジッドに宛てた書簡が、以後  
大戦を挟んで十有余年にわたる両者の交流の始まりとなる――

《書簡1》<sup>3)</sup>

〔パリ〕, 1936年12月31日〔木曜〕

アンドレ・ジッド様  
ボヌ通り43番地（7区）  
ガリマール書店気付

拝略

こうしてあなたに手紙を差し上げるのは些か大胆すぎるのではないか、私には判断  
のつきかねるところですが、あなたのお名前を書きながら、私はまるで自分の師や親  
に宛てているような気がいたします。というのも実のところ、私には家族に対する〔そ  
れ相応の〕思い出が何ひとつ残っていないからなのです。

私があなたのお名前を知り、その後あなたの作品を知ったのは、北平（北京）の〔清  
華〕大学に通っていたときのことでした。あなたの考え、あなたの倫理（というのは、  
有無を言わずあなたをモラリストだと見なす人が後を絶たないからですが）に触れ  
たことは私にとって決定的でした。私の人生、私の考えはあなたの考え方に影響・支  
配されるあまり、最初は自分を弱い存在だと感じました。私に手を貸してくれる人を  
探していたのです。「私の本は捨てたまえ。これはまさに人生において有りうる数千の  
態度のうちのひとつでしかないと思いたまえ。君自身の態度を見つけるのだ!」。親愛  
なる先生（あえてこのように呼びます）、喜んでそういたしますが、この息苦しい  
世の中で、満足しきっている人間か、さもなくば顔をしかめるだけの人間にしか出会  
わないのに、あなた〔ご自身〕は何を欲しておられるのでしょうか。独りで戦うこと  
ばかりなので、私にはほんの少しの励まし、ほんの少しの支えが大事でしたが、それ  
を見出したのがあなたの本だったのです。かくして私はラモン・フェルナンデス氏や  
レオン・ピエール＝カン氏の著作を読み始め<sup>4)</sup>、最終的にはあなたについて書かれた、  
我が国のような古い国で見つけることができたあらゆる本を読みました。また、この

国の公衆にあなたを紹介すべく論文を書き始めました。そしてご高著『贗金つかい』を学位論文の主題に選んで大学での学業を終えました（私自身は外国語・文学科の学生だったので、その論文は英語で書かれました）。

それから私は長い間訪れることを夢見ていた貴国へ向かいました。知り合いもおらず、いつも孤独だった私にとって、パリのような大都市で過ごした最初の日々がどれほど馴染めず苦痛であったかは想像もおつきにならないでしょう。いつか、たとえばリュクサンブール公園で、あるいは散歩の途中であなたに会えるだろうと何度自分に言い聞かせたことか。お会いしに行きたいが、初めの頃はご住所が分からず、また私のフランス語ではほとんど理解していただくことは適わぬことでした。待って、待って、気づけばパリに来てからやがて1年が経ちます。私は中華レストランに行く途中で（いつもそこで1日1回食事をするので）、その都度リュクサンブール公園の向かいにある書店であなたの肖像を眺めて自分を慰めていました。しかし、あなたが私と同じ街に住んでおられることを思い出すと、どうにも耐えきれなくなります。まだまだフランス語はさほど達者ではありませんが、少なくとも今では以前よりも上手く自分の考えを表現できるようになっていると思います。1936年の大晦日の今日、あなたへの手紙を認めながら、私はあなたも自分の意志を行使すべく定められた瞬間を選ぶスタンダールの主人公の如し、というか『贗金つかい』の登場人物「ベルナルの次の一文に促されているのです——「お前がすぐしなかったら、何時するというのはか？」[RR2, 215]<sup>5)</sup>。親愛なるジッド様、ほんの数分だけでもお伺いさせていただけませうでしょうか。擱筆するにあたり、1937年のご多幸をお祈り申し上げます。

盛澄華

トゥルヌフォール通り 25 番地  
パリ（5区）

この書簡に対してジッドは5日後（1月5日）、「素晴らしいお手紙を頂戴し、私は心からあなたの面識を得たい」<sup>6)</sup>と、自宅への来訪を強く促した。この誘いに盛澄華は喜び勇んでヴァノー通りの作家宅を訪れるが、次はその折りに味わった感激をさっそく熱を込めて綴った書簡——

《書簡2》<sup>7)</sup>

〔パリ、19〕37年1月10日、日曜

親愛なる先生

（これ以外に何とお呼びすればよいのでしょうか）

先日あなたのお傍にいたときの私の幸福感と喜びは何人にも計り知れるものではありません。私は長いことお宅までの道筋を探し、階段の後ろに隠れているコンシェルジュを探しましたが、誰もいません。やっと現れたその人が私に言いました。「ジッドさん？ 最上階ですよ」。私はエレベーターに乗るのも忘れ、急いで駆け上がりました。心臓の鼓動があまりに激しく、ドアが開けられたときには名を告げることさえできませんでした。廊下であなたを待ちながら、興奮を鎮めようと努めました。そして突然、

「よくおいでなされた」という歓迎の声が聞こえましたが、あなたがどこから姿をお見せになったのかも分かりませんでした。私は思いました、ついにあなたを見つけた！

なんと奇妙なことでした。あなたを前にしていると、ほかの人と話すときによく経験する気詰まりといったものはまったく感じなかったのです。おそらく私はひどく下らぬ話をしてしまった。でも私は幸せでした。嗚呼、今日は私の一生の大切な思い出になるでしょうが、この感謝とお礼の気持ちをどのように言い表せばよいのか！

おそらく若者の大げさな物言いにすぎぬとお思いでしょうか。理由を説明いたします。私には12人の兄弟姉妹がいることはすでにお話したとおりですが、我が家でのこの家族生活は非常に耐え難いものでした。父はとても変わった人です。ですが愚かではなく頭脳は優秀、以前は法学部の教授であり議員も務めました。彼の前ではすぐに凍りつくような気がするほど冷たい人でした。彼は子供たちに一言も話しかけませんでした（これはまさにそのとおりで、ある時、彼の友人が私の兄弟のひとりが何歳かと尋ねると、彼は「名前も区別できない」と答えたのを覚えています）。彼の口癖は、「私の義務は子供たちを学校に通わせ、学業を続けられるように金を与えることだ」というものでした。時々私は自問するのです。子供たちの存在が彼にとってそんなに嫌なことなら、なぜ彼はそこまでしたのだろう、と。母はといえば、違うタイプで、謙虚にして控えめです。いつも子供たちにわずかな愛情や感情さえも示すことを恐れています（おそらく父が彼女に与えた影響のせいでしょう）。このような家庭生活が私にとってどれほど苦痛で悍ましいものであったか、もはや想像がおつきでしょう。今でも私は身の縮むような思いがし、孤独を感じます。誰にでも愛想よくしようと努力しましたが、それも無駄なことで、誰も私を理解してくれません。でも私には完全な自由があり、好きなことをさせてもらえます。しかしそこにこそ困難があるのです。この溢れんばかりの自由というか、むしろ無関心がいつも私を不安にさせるのです。最悪なのは、私が自己放擲のできない性格だということです。いつも何かを探してはいるが、それを見出すことは決してないのです。今日に至るまで、この心配が私を道徳的にも知的にも悩ませており、だからこそ今あなたにご助言を求めている次第なのです。物質的な援助は必要ないのですが、父からお金を受け取るたびに私は恥ずかしく思ってきました。私にとってそれは施しのようなもの、見知らぬ人からの施しのようなものだからです（彼としてはおそらくスタンダールの『リュシアン・ルーヴェン』の父のように「息子は生まれながらの債権者である」と考えているのでしょう）。もっと早く姿を見せなかったことをお咎めになれましたが、あなたはご自分がどれほど私にとって近寄りたがい存在であるかをご存じなかったのです。あたかも賛嘆・凝視はするも、触れるのを躊躇うが如きもののなのです。私にとっては賛嘆というより、言葉にするのも憚られますが、むしろ偶像崇拜に近いのです。

いつもあなたのお傍にいられるならば！ 私にはベルナルのように秘書になれるほどの運気はありませんし、またその能力もありません。ですが私のことを〔何でも言いつけられる〕使用人として処していただけないでしょうか？ そういう点では私はほかの人と同等の力があると思います。あまりお邪魔になってはいけませんが、あなた

の近くに身を置けるならば、というのが私の切なる願いなのです。少しでもお役に立てればなにより幸いに存じます。

親愛なる先生、心からの敬意をもってご挨拶申し上げます。敬具

盛澄華

トゥルヌフォール通り 25 番地  
パリ（5 区）

この書簡に应えて同月 21 日には「また私に会いに来ていただきたい。気兼ねは無用です」<sup>8)</sup>と返信を送っていることから、ジッドにとって盛澄華との面談が喜ばしいものであったことは疑えない。

さて、これ以降のジッド書簡として筆者は前稿において 4 月 13 日付、5 月 22 日付、9 月 1 日付および 10 月 14 日付の 4 通を紹介しているが<sup>9)</sup>、盛澄華の作家宛のほうは明らかに遺失のせいで、次に立項する書簡まで一切残存が確認されていない（なお当該書簡については、現在カトリヌ・ジッド財団での所在が不明のため、分類整理時の備忘に若干補筆したものを示す）——

《書簡 3》<sup>10)</sup> [パリ], 1938 年 4 月 21 日〔木曜〕

この書簡を綴った時点では、盛澄華はジッドが喪中であることをまだ承知していない。ヴァノー通りの私邸でジッドに会いたいと願うも、作家の邪魔になるのではないかと危惧。NRF 版ジッド『全集』の最初の 10 巻を読了、全ページを書き写し、正誤表を作成したところである。また、しばしばジッド作品の発想源となったノルマンディー地方キュヴェルヴィルの雰囲気浸るべく同地を訪れようとしていた。

4 月 17 日に唯一無二の精神的支柱、妻マドレーヌを失ったジッドの悲嘆は大きかったが、その翌々月、英文学の研修のためエディンバラに着いて間もない盛澄華から便りが届く。自身の健康状態に対する心のこもった彼の気遣いは、たとえ一時ではあれジッドの慰めとなる<sup>11)</sup>。だがとりわけ彼を喜ばせたのは、自作『田園交響楽』を読み解く文通者の慧眼であった——

《書簡 4》<sup>12)</sup>

1938 年 6 月 5 日〔日曜〕, エディンバラ

親愛なる先生

パリから気送速達でお送りした手紙をお受け取りになったかどうか分かりません。当時、私はノルマンディーに行くつもりで、その手紙のなかで実用的な情報、特にキュヴェルヴィルまでの道筋をお尋ねしました。4 月末にパリを発ちましたが、ディエップには寄らずにスコットランドに直行しました。エジンバラですでに丸 1 カ月を過ごしています。

ご返信がないので、お元気かどうか、現在パリにいらっしゃるのかが気が掛かります。あなたの日記中の言及に接すると、ご健康状態が心配になります。

私はこちらに来てからかなり元気に仕事をしています。今もあなたの全集を読んでいます。それによって、あなたから遠く離れてはいますが、私の近くにおいでだと感じています。ドイツに滞在中は、あなたの作品群を携えておりました。エディンバラにいる今も、それらを読むことから多くのものを得ています。何より道徳的にも知的にも最も私を導いてくれる日記の断章からです。あなたの日記を一冊にまとめた別版ができれば、読者はどんなに感謝することでしょう！

ご高著『田園交響楽』について少しご説明をいただきたいのですが、この本の「時間の流れ（time sequence）」にはひどく戸惑いを覚えました。申すまでもなく、牧師の《第一の手帖》は、彼の身に起こったことの回想に外なりません。しかし日付に矛盾があるのは一目瞭然です（この日記の前の日付が2月10日であるにもかかわらず、牧師は2月27日に「それ〔前夜の大雪による孤立状態〕を利用して昨日書き始めたこの記述を続けよう（第9巻16頁〔RR2, 10〕）」と書いているのです）。

牧師が我々に語った話がその日記のなかで初めて現実味を帯びるのは、5月8日（第9巻64頁〔RR2, 39〕）以降のことに私には思えます。つまり次の一文が我々に証言している日付、というよりは、この文のとりわけ時制によって現実味を帯びるのです——「マルタン医師が昨日ラ＝ショー＝ド＝フォンから来た」。このことを確認したうえで、もうひとつの点に移りましょう。

「すでに書いた去年の夏の会話以来、半年以上も経ったが、その間（驚いたことに）私たちのあいだで愛の言葉は二度と口にされなかった……」（第9巻73頁〔RR2, 44-45〕）。

さて、この日記のページの日付は5月18日とされているので、半年前ということは、ここでいうおよそその日付は11月になり、前年の夏ではなく冬になってしまいます。しかし問題をさらに不可解にしているのは、牧師とジェルトリュードとの会話が報告された日付は3月12日なのに、この3月が今年のことなのか前年のことなのかまったく示されていないことなのです。

私はあなたの日記から（第9巻445頁〔JL, 1073. 1918年10月16日〕）、あなたがイギリス滞在のためにしばらく中断していたこの本を再開するのに「ひどく難儀し」、ご自身の心のなかで牧師の思考を「活気づけんとして」わざわざ福音書とパスカルを再読なさったことを知っています。そして翌日〔正しくは3日後の同月19日〕のあなたの日記には、次のようにも書かれています——

「こんなに早く『田園交響楽』の終わりに来てしまったのを見て、やや不安になる。つまり本の比率・バランスからすればもっと広く展開しそうなのに、主題がまさに尽きてしまったような気がするのだ……」（第9巻445頁〔*ibid.*〕）。

そうです、親愛なる先生、私はこのようなことに非常に敏感であり、あなたが本をお書きになるさいのあらゆる注意深さ・自制心・労苦を評価して止まぬ者ですが、この『田園交響楽』の（あえて言えば）欠陥・欠落は、その遺漏が正確には美学的なもの

ではなく、むしろ真実らしさに対する不注意に依るのであり、「本の比率・バランスに見合うもっと広い展開」というよりも、その展開の諸点がここでは性急さと不注意によって損なわれています。著者は、我慢が足りず、何としてでも登場人物を自分の跳躍に連れて行きたがっているような印象を受けるのです。そして、第9巻78頁[RR2, 48]で私が読むのは――

「ジェルトリュードは昨日ローザンヌの病院に入院した。20日経たないと退院できない……」。

そして突然、何の前触れも説明もなく、1週間も経たぬうちに5月27日の日記――「彼女は明日帰ってくるはずだ……」(第9巻79頁[ibid.])

ジェルトリュードのような症例の手術が1週間で終わるはずがないことは「常識中の常識(after the most commonly common sense)」であって、著者ご自身もよく分かっておられたところ。しかるになにゆえこのような奇跡がおこりうるのでしょうか？ またジェルトリュードが退院当日ひとりで外出するにまかせたというのも、同様にありえぬことです。たとえ自殺しようと思えば「人は常にそれなりの策を見い出す(Man findet immer einen Ausweg.)」ものだとしても。

また、ラストシーンでの牧師の役割もいささか悲壮すぎるように思われます。

親愛なる先生、私は誠心誠意を込めてこれを書いています。あなたがこれらの指摘を屁理屈だとお取りにはならぬことは存じております。とりわけ日付の矛盾については、5年前に初めてご本を読んだときにはまったく気づきませんでした。私の思い違いがあるかも知れませんが、いずれにせよ、あなたのご説明をお待ちします。「私が書いたものを判断するのは、芸術の観点からであり、批評家は決して、あるいはほとんど決してその立場に立つことはない」<sup>13)</sup>、そうお書きになったことに私は全面的に同意しております。

現時点ですでに第13巻まで読み進めており、1,2カ月後には第15巻を読み終えることができると思います。ノートを取りながらなので、進捗は恐ろしくゆっくりです。この点について、1932年以降の出版作品も見込んでおられるのか分かれれば嬉しいのですが。というのも、予定の巻数からすると十分な紙幅はなさそうなもので。

もうひとつお尋ねしたいのですが、アンリ・アルベールの編集になるニーチェ全集の翻訳<sup>14)</sup>についてはどのようにお考えでしょうか？ 新フランス評論は彼の全集の新版を出す予定はあるのでしょうか？ ニーチェ作品の英語訳で最も優れているものはどれでしょうか？

当地の天候は好くありません。空は暗く、しばしば雨天です。ですが少なくとも7月までは滞在いたします。それまでにお手紙をくださることを願っています。親愛なる先生、お忘れなく、お待ちしております。敬具

盛澄華

エディンバラ / グレンガイル・テラス 16 番地 / ミラー方

書簡が言う「時間の流れ」の不備について、筆者自身は前稿でクロード・マルタンの画期的な『田園交響楽』校訂版に言及しつつ、以下のように推定を記していた——「ジェルトリュードの盲目は治療可能だと知った牧師が歓喜に満たされ、彼女を固く抱きしめるのは、自筆稿段階では「(189.年) 5月9日」のこととされていた。だがその後、作者の現実の生が虚構のなかにダイレクトに侵入してくる。すなわちジッドは、マルク・アレグレ青年への愛を強く自覚した「(1918年) 5月19日」を内心の記念日として自作に刻印すべく、公刊テキストでは上記「5月9日」をはじめ7つの日付をそれぞれ10日ずつ後退させるのだ。だがこの強引ともいえる変更によって後続の日記記述との間に時系列の不整合が生じる結果となったのである」<sup>15)</sup>。盛澄華はこういったジッドの「誤操作」をはるかに具体的かつ精確なかたちで列挙・指摘していたのである。

この後まもなく盛澄華は、やはりフランスに留学しており、かねてより交際中だった同国人女性・韓恵連をエディンバラ<sup>タイフィレン</sup>に呼び寄せ、同地で結婚、8月末には二人してフランスに戻り、パリ近郊のアルクイユに居を定めていた。翌年5月、盛澄華は久方ぶりにヴァノー通りを訪れるが、新妻を日本人と誤解したジッドの不用意な一言が彼をいたく傷つけてしまう。日中戦争の最中であるだけに、彼にとって作家の応接はなおのこと承服しがたいものだった。その憤懣と悲嘆とを率直に綴ったのが次の書簡——

《書簡5》<sup>16)</sup>

〔19〕39年5月10日〔水曜〕

ジャンヌ・ダルク大通り1番地／アルクイユ、セース

親愛なる先生

今朝私がお宅で経験したことをすべて率直に申し上げたほうがよろしかろうと思います。お宅にお邪魔してまもなく、私はひどく気分を害し、なんとも泣きたいような気持ちになりました。それが単に突発的な動揺だったのか、それともただその折の事情のせいだったのかは分かりません。しかし、あなたが私に次のように書いてくださったのはほんの数カ月前のことでした——「あなたの若き奥さまが亡妻のような魅力と美德とをすべて備えておられんことを、云々」。しかるに今日、あなたは私の妻が日本人かとお尋ねになった。私に対するあなたの共感と愛情は疑えぬところですが、信じてください、親愛なる先生、今日の打撃は私にとって本当に残酷なものだったのです。それによって傷ついたのは、単に私の個人的な感情だけではなく、多くの障害や苦難にもかかわらず、残忍・非道な侵略に直面しながら戦いを、自由と独立のための闘いを輝かしく続けている被害国〔祖国〕の脈打つがごときその心だったのです。あなたは私に、日本人の友人たちとのご自身の最近の関係について耳にしたことがあるかど

うかお尋ねになりましたが、ええ、友人たちが手紙でそのことを話題にし、それがすべて本当なのかと尋ねていました。今朝、あなたが『田園交響曲』を脚本にした日本映画の製作に特別な関心を示されたことは、残念ながら、私にとっては疑問視していた彼らの見解を裏付けるものでしかありませんでした<sup>17)</sup>。言うまでもなく、誰もが誰とでも友好的な関係を築くことができますし、いかなる外国の芸術にも興味を持ちえますが、特定の状況下や特定の機会には、それ自体は正しく無害な行為が、何よりも偉大な人物、そしてあなたのような偉大な作家の態度である場合には、まったく異なる性質の結果を生みうることを仮にも分かっておいでだったならば。あなたのお名前は正義の象徴として我が国では際立っています。あなたの言葉や振る舞いは、遠い国々でも常に反響を呼ぶということを申し上げる必要があるのでしょうか？ ソ連邦に対しあなたがかつてお示しになった同情心は我が国で熱狂的に支持されましたし、6年近く前にあなたがご自身の全集の日本語版に序文を付すことを拒否なさったとき<sup>18)</sup>、そのニュースが我が国でセンセーションを巻き起こしたことはすでにご指摘したところです。もちろん感情的な人々が見せるこの種の態度自体は愚かで馬鹿げたものではありませんが、人間的には理解できるものであり、彼らの心の中であなたの注意・関心が如何に求められ貴重であったかを示しています。

何千人もの兵士や民間難民が日々敵の砲火にさらされている今日にあってはとりわけ、かくまで独立不羈にして尊敬を集める作家が、征服の飽くなき野望しか目指していない国に対して同情を示すのを見るのは驚くべきことではないでしょうか？ 私の不安と懸念は主にあなたが彼らの罠に陥ったことから来ています。己を守らんとして自由と独立を望むだけの人々に対し非人道的に残酷であるだけに、強者に対する彼らの優しさは催眠術的であり意図的なものののです。彼らの大使館が問題の映画を迅速にパリに送り、すべてが完璧な礼儀正しさと丁寧さで処理されたことをご自分でご確認なさらなかったのでしょうか？ 非常に慎重にであれ、自分たちの目的のためにあなたたちを糾合するため、これ以上の何ができたといいのでしょうか？ 彼らのプロパガンダ手段はしばしば見事なまでに巧妙です。我々の国で毎日起こっている戦争にかんし、ほとんどの新聞が痛ましくもかように沈黙を守っていることに人々が驚いたことがあるのでしょうか？ 否！ それは、我々の敵が気前よく新聞を買収し、正義の視点が意図的に抑圧されているからです。最近、新聞において日本が第一次大戦開始時にドイツ人の手から奪い、ワシントン会議の決定によって中国に再統合された膠州の領土をドイツに返還させるようドイツに話を持ち掛けているというニュースを読むことができなかったのでしょうか？ なぜこの無私の優しさ（領土は日本のものではないのに）なのでしょう？ その一方で、最近のアジアに対する警戒心、ヨーロッパでの戦争に備えて艦隊を動員することを拒否していることがお分かりになりませんか！ そうすることで、日本はすでに危機的状況にある民主主義諸国の同情を勝ち取っているのではないのでしょうか？ この偽装を利用して、日本は東洋でやりたいことを何でもできるようにしないのでしょうか？ 日本は、ヒトラーやムッソリーニ同様、ルーズベルトが、自分に非難のメッセージを送らなかったことを嬉しく思わなかったのでしょうか？ 日本は即座

に大使館を通じてルーズベルト大統領に政府の承認を送りませんでしたか？ 日本は極東に重大な利益を持つ特定の国々の懸念を和らげるためにあらゆることをしたのではないのでしょうか？ まさにスペインの現況と同じように、万事が日本の満足いくかたちで既成事実化される日の到来を待ち望んでいるのではないのでしょうか？ 今日の我々の務めは厳しいものですが、侵略者に対する私たちの態度は常に勇敢で毅然としています。そして正義感を持ち、私たちの自由と独立という大義において物質的または道徳的に私たちを助けてくれるすべての人々に対し、我々の感謝の念が如何ほどのものでもないというのでしょうか？

この手紙を認めるにあたり、私が心懸けたのはただただ、あなたに対して状況を明確にし、今朝私が感じた不快感、そして私を苦しめてやまない不快感をすべて説明することだったのです。匆々

盛澄華

なお、書簡の末尾余白にはジッドの自筆で次のように返信の下書きが記されている——「一般状況に対してあなたが抱きうる大きな悲しみに、軽率にも個人的な悲しみを加えてしまいました（本状がそれを消し去ってくれますように）。それが何よりも私の苦痛であることをご理解ください。そして私があなたに対し心からそう感じていることをお信じください。この私や私の真の愛情をどうかお疑いなきように」。この下書きは大幅に書き足され、己の対応の拙さ、誤解の原因を具体的に謝罪・説明するものとなって同月 13 日、文通者に宛て発信されてゆく<sup>19)</sup>。

かくてジッドの真摯な詫び状を読んだ盛澄華は、日をおかず文面穏やかな便りを返し、早くもその筆をほかの話題へと転じるのであった——

# 《書簡 6》<sup>20)</sup>

ジャンヌ・ダルク大通り 1 番地 / アルクイユ（セヌヌ）

[19] 39 年 5 月 16 日 [火曜]

親愛なる先生

お手紙は私に大きな安堵と慰めをもたらしてくれました。心よりお礼申し上げます。このような誤解を招いた原因は私のほうにあるのかも知れません。というのも、あなたにとっては予期せぬものになりかねぬ訪問のことを予めお知らせしていなかったからです。〔アンリ・〕トマに会いに行ったのは 5 月 5 日のことで、（復活祭の休暇以来会っていなかったので）彼から（エジプトからの）あなたのご帰還の知らせを聞きました<sup>21)</sup>。私たちがポルト・ドルレアン<sup>22)</sup>の近くを歩いていると、彼は突然、一緒にあなたに会いに行かないかと聞いてきたのです。突然にご訪問することに不安を感じながらも、決断は早く、我々は 11 時半頃、お宅に着きました。ドアを開けてくれた女性によると、あなたはその時間帯はとても忙しく、誰にも会えないとのことでした。お宅

を辞去するさいトマは、別の約束を取るためにあなたにお電話することを提案し、一緒に会いしに行けるよう私には知らせようと言ってくれました。この約束は水曜日の午前中だったのですが、ちょうど当日の朝、日本大使館の駐在官の一人が訪ねてくる予定だったことをお手紙から知ったのです。しかし、この件についてはもう再び話題にしないほうがよろしいでしょう。

いずれお宅に伺ってお会いできますが、おそらく今週は無理かも知れません。第一に、あなたが現在ご多忙であることは承知していますし、私自身もここ数日は真面目な仕事に必要な時間も取れぬほど、細々とした用事に忙殺されております。赤ん坊には消化器系の問題があって、さらに看護が必要です。私は家では看護夫と料理人を兼ねており、いわば何でも屋なのです。あなたがご多忙でないときに一言いただけるのを待ちます。ご高著『地の糧』の拙訳と一緒に点検することができましょう<sup>22)</sup>。

この翻訳にかんしては、もっと早くお話ししなかったことを後悔しています。躊躇<sup>ためら</sup>いは、私が上手く訳せたかどうか、そして私があなたとご高著に値するものかどうかと恐れていたことから来たものです。あなたはご結婚後まもなくこの本をお書きになりましたが、私のほうは自分の結婚の直後にその翻訳を始め、ちょうど赤ん坊が生まれる前に完成させる時間の余裕がありました。すぐに出版することは考えておりません。時々新しい修正・訂正を加えることができるように、しばらくは鞆のなかに入れておきたいと考えています。まさにご指摘のとおり「タイミングが悪い」のです。私は人々がもっと飢え、そしてこの翻訳を提示するに足る新たな種類の飢えが訪れるのを待っています。そして、それは戦後の若者たちにとって新たな勇気と新たな力を与える真の糧となるでしょう。（『地の糧』を適切に消化するには十分な体力が必要であることに留意せねばなりません。）

私の最後の手紙であなたを悲しませたことを深く後悔しています。本状がそういった暗雲をすべて晴らしてくれんことを。敬具

盛澄華

追伸。ちょうど1年前エディンバラから差し上げた手紙で唯一の願いとしておりました『日記』を1冊頂戴できればと<sup>23)</sup>。

第1段落で名の挙がるアンリ・トマについて一言しておく、ジッドは前年11月、この少壮作家・詩人に同世代の盛澄華（ともに1912年生まれ）を紹介していた——「友人の盛澄華と話をしていた、君も彼と話をすれば楽しかろうし、彼にとってもそうだろうと思った。という訳で、迷うことなく彼を君の元に差し向ける」<sup>24)</sup>。老作家の仲立ちを機にトマと厚い友情で結ばれた盛澄華は、中国帰国後のジッド宛でも折りにふれて、その近況を尋ねることになる。

この4カ月後には大戦が勃発（9月3日対独宣戦布告）、その騒擾のなか書簡による交流は一時的に中断する。翌月、盛澄華は4年間の留学を切り上げ、フ

ランスで生まれた長男を連れ、妻ともども中国に向けて旅発つが、帰路船上でジッドに宛てて次の書簡<sup>したた</sup>を認めている——

《書簡7》<sup>25)</sup>

〔19〕39年10月28日〔土曜〕

アンドレ・ルボン号にて

親愛なる先生

航海に出ですでに23日目。船旅にありがちな不快感や揺れがなければ、もっと長い手紙を差し上げていたかも知れません。しかし、どこに手紙を送ればいいのかも分かりません。総動員の2日後、ヴァノー通り1番地乙〔のご自宅〕に赴きましたが、疎開の時期とあってか、あなたにはお目にかかれませんでした<sup>ビス</sup><sup>26)</sup>。妻は生後4カ月になる赤ん坊のことで少々案じていましたが、パリやその外に親戚や知人もいないので、アルクイユに留まるのは諦めました。フランス船が22日に極東に向けて出航することを知ったのは10月18日のことで、翌日にはパリを出発しました。残念なことに、マルセイユに到着しても、パリで聞いていた情報を確認できる人は誰もいませんでした。私たちにできることは待つことだけだったのです。マルセイユで3週間待機し、ようやくアンドレ・ルボン号の切符を手に入れ、11月6日にマルセイユを出発しました。この23日間で、すでにポートサイドを通過し、ジブチ、コロンボに到着。あと2日でシンガポールに着き、同地でこの手紙をあなた宛てにお送りします。

アンドレ・ルボン号はすでに建造されて30年。〔そのため〕通常マルセイユから上海までの航路は、イタリア船なら26日のところ、35日かかってしまいます。しかも今回は特に用心のため、また重量があるため（船は荷物が満載で、常にはあらず客室はほとんどすべて埋まっています）、速度はいつそう遅くなっています。日没と同時に、船はジグザグに進みます。船外には明かりがありません。客室には電球がなく、夜間のデッキでの喫煙は固く禁じられています。しかしこの頃は月や星が出ています。海はいつも比較的穏やかですが、暑さは厳しい。いずれにせよ敵に襲われる危険は去ったようで、あと2週間もすれば上海に到着しているでしょう。

パリを去るにあたり、荷物の一部を放棄せざるを得ませんでした。最も心残りなのは、この数年間パリに滞在していた間、あなた方から受けた歓待とご配慮にお礼を申し上げてお別れできなかったことです。しかし、いつの日にか我が国でお会いし、港の岸壁でお目にかかりたいと思っています。もしこの手紙をお受け取りになり、一言お書き添えいただけるようでしたら、次の住所まで航空便でお送りください——

上海フランス租界 / ドルフュス通り 68 番地 / <sup>ソースーマイ</sup>措斯麥方

というのも、私は1カ月後に上海を発ち、内地へ向かう予定だからです。

また、頂戴できればと切望しているものがあります。あなたの『日記』（プレイアド版）を1冊手に入れたいのです。あなたから頂けるのをあれほどまでに望んでいなかったら、フランスを発つさいに自分で購入していたことでしょう。私にとってフランス滞在の最も貴重な記念品のひとつになります。私のためになんとかして手に入れ

て、上記の住所にお送りくださいませ。

アンリ・トマのことにも想いを馳せています。彼は現在軍隊にいるはずです。彼の住所をご存知でしたらご教示ください。敬具

盛澄華

ジッドは南仏アルプ＝マリティーム県の小村カブリでの逗留に続き、10月初にはニースの画家シモン・ビュッシー夫妻宅に居を定めていたが、上掲書簡はパリから転送されて翌月下旬、おりしも盛澄華のことを案じ、その行方を探っていた彼の元に届く。便りを待ち望んでいたジッドは日をおかず、文通者指定の上海の仮寓先に宛てて次のような返書を送っている（11月28日付）<sup>27)</sup>——

どれほどご帰国前にもう一度あなたとお話したいと思ったことでしょう。[…]

お手紙のなかに、いつの日にかあなたの祖国で私とまた会いたいとあったのを嬉しく思います。この共通の夢を私は心のなかに持ち続けましょう。嗚呼！今は何も計画はありませんが、中国を知りたいという願いはここ数年次第に私の心のなかで強くなっています。また、あなたと知り合ってから、この夢は私にも実現の見込みがありそうに思われています<sup>28)</sup>。[…]

手紙で旅の安全を知らせていただければとても嬉しく思います。[…]

私はすでにパリに手紙を書いてあなた宛に『日記』を一部送らせました。というのも、この『日記』は〔完売してしまい〕もう市場には出回っていないからです<sup>29)</sup>。

親愛なる盛澄華、またお会いしましょう。敬具

決まり文句としての「またお会いしよう」ではあったものの、結果的にふたりが実際に相見える<sup>あいまみ</sup>機会とは二度と訪れない。また以後1947年までの7年間、文通が完全に途絶していたか否かは現時点では即断できないが、いずれにせよ戦争による空白と距離とが両者の交流の大きな障害となったことは否めまい。

## ＊

ジッドは1946年末ないし翌年初めに盛澄華に手紙を送ったものの、一向に音信がないため、すでに文通関係にあったアメリカ留学中の中国人・巫寧坤<sup>ウーニンクアン</sup>に彼の近況を問い合わせていた。それに対する返書の文面からは、少なくとも盛澄華との書簡交換が相当間遠になっていたことがはっきりと読み取れる——

《書簡7 bis》 巫寧坤のジッド宛（原文は英語）<sup>30)</sup>

〔ノース・マンチェスター〕、1947年2月17日〔月曜〕

親愛なるジッド様

1947年2月11日付のご丁寧なお手紙は、わずか5日で私の元に届きました。再び

お便りを頂戴できて大変嬉しく存じます。

盛澄華氏がまだ手紙を差し上げていないと聞いて残念に存じます。私は中国の友人を通じて、あなたの現在のご住所を彼に送ったところでした。あなたとの文通再開に彼が大喜びすることは間違いありません。さらに確かなのは、彼はあなたのことを忘れてはいませんし、あなたに腹を立てているわけでもありません。彼は中国語訳『地の糧』への序（1942年11月、於・陝西省城固）で、あなたとの友情を語り、あなたへの心からの賞賛を表明していました。彼が書いたところでは——「1939年9月、私はパリ郊外の自宅からジッドに電話をかけた。先方の部屋で呼び出し音が鳴るのが聞こえたが、誰も出なかった。翌日、私はマルセイユに向かった。その年の11月、私はニースからの手紙と新しく出版された『日記』を上海で受け取った。それが最後の知らせだった……」<sup>31)</sup>。私の拙い訳でも、あなたへの彼の深い想いを見落とすことはできません。

1943年に中国を発つとき、私は『地の糧』『放蕩息子の帰宅』『狭き門』の中国語訳を携えていました……。最後の作品は航海中に紛失してしまいました。残りの2点は、ここ3年間の「流浪」のあいだに時折<sup>ひもと</sup>繕きましました。いずれも状態は悪いですが、別便でお送りします。『放蕩息子〔の帰宅〕』は下之琳教授<sup>ジェンチーリン</sup>が翻訳しました。つい数日前、彼から手紙をもらいましたが、そこには最近上海で出た新版の序文を書いたとありました。また昨年のある手紙では、彼は友人を通じて中国語訳の『新しき糧』をあなたにお送りしたと書いており、それがお手元に届いたかどうかと案じていました。彼はほかのご高著も何冊か翻訳しています<sup>32)</sup>。

私はここのカレッジで英文学を勉強しているのですが、来年早々に卒業の予定です。どこかの大学院で勉強するつもりです。何か私に向けたアドバイスがありましたら大変ありがたく存じます。学業を終え次第、すぐに中国に戻るつもりです。

ご自身のこと、パリのこと、お話しになりたいどんなことでも、どうぞお便りをお寄せください。

あなたが翻訳なさった『ハムレット』が上演されたという嬉しい報告をたくさん読みました<sup>33)</sup>。いっそうのご成功とご健康をお祈りいたします。敬具

巫寧坤

N. K. Wu / 201 W. Main St. / North Manchester / Indiana, USA

ジッドの先便はまず間違いなく、何らかの原因が禍して名宛人の元には届いていなかった<sup>34)</sup>。いっぽう、4月半ばになって偶々上掲の巫寧坤宛書簡を読み知った盛澄華は即日、久方ぶりに作家に手紙を送り、フランス出国後のあれこれ、西北大学や復旦大学での勤務、ジッド作品の翻訳・紹介といった最近の仕事などについて事細かに<sup>こま</sup>報告している——

《書簡8》<sup>35)</sup>

〔上海、19〕47年4月16日〔水曜〕

親愛なる先生

現在のご住所が分からないので、私は数日前ガリマール書店（ボヌ通り 43 番地）  
 気付で何冊かの本を入れた包みをお送りしましたが、お手元に届くかどうか心配です。  
 私が訳した『贗金つかい』『地の糧』『ジュヌヴィエヴ』で、最初の 2 冊は戦時中に  
 重慶で、最後の 1 冊は戦後に上海で出版されたものです<sup>36)</sup>。

そして奇跡的にも今日の夕方、大学のチューターが<sup>ウー</sup>という私の知らない方に宛て  
 られたあなたのお手紙を持ってきてくれました。彼女の説明によると、現在アメリカ  
 にいる彼女の父親の友人とのことです。あなたの消息とご住所を知った喜びをどう言  
 い表したらよいのか分かりません。まだヴァノー通りにお住まいなのですね！ 急いで  
 この手紙を書きましたが、お伝えしたいことがたくさんありすぎて、何から始めたら  
 いいのかも分からないほどです。まず第一に、ご安心ください、親愛なる先生、私た  
 ちを隔てる大きな距離にもかかわらず、精神において私はいつもあなたのお傍におり  
 ます。私の長い無沙汰の原因は、お信じいただいて結構です、怠慢でも忘却でもあり  
 ません。何年もの間、ヨーロッパと連絡を取る手段がまったくなかったことはご存じ  
 でしょうが、私はいつもご高著にはまだ翻訳すべきものがたくさんあるのだから、あ  
 なたにふさわしい存在になるために、もっと努力しなければならないと自分に言い聞  
 かせていました。そうして私は躊躇し時が過ぎていったという訳です。

そうです、時は流れ、私がフランスを去ってからもうすぐ 8 年になります。航海中  
 の定期船から最後の手紙をお送りしたのは 1939 年 10 月だったと記憶しています〔『書  
 簡 7 〕〕。「内地」つまり自由中国に出発する前に、上海であなたからの返事を受け取る  
 時間がありました。南京陥落によって、すべての国立大学は、戦前には高等教育が存在  
 しなかった内陸部へと疎開することになったのです。私が 1940 年から 43 年まで過ご  
 したのは、中国北西部の小さな町にある大学〔陝西省城谷の西北大学〕のキャンパス  
 でした。英語・フランス語・ヨーロッパ文学を教えていました。暗い時代でした。時  
 折、敵機がやってくる以外に娯楽はなく、重慶から遠く離れたこの原始的な小さな街  
 には「塹壕」さえありませんでした。大学は田舎の真ん中にあり、サイレンが鳴り響  
 くと、私は野原のあちこちにある墓の陰で穏やかにキーツやシェイクスピアを読み、頭  
 上を飛ぶ敵機を眺めたものです。敵機は時には大災害を引き起こす爆弾を無造作に投  
 下しましたが、如何なる幸運によるのか、私が爆弾の被害に遭うことは一度もありま  
 せんでした。『贗金つかい』の翻訳を完成させたのは、この隠遁と孤独の数年間でした。

そして 1943 年の春、私はその北西部の小さな街を離れ、重慶に着きました。以前は  
 上海にありましたが、今は重慶郊外に疎開していた復旦大学で教え始めたのです。パ  
 リで翻訳を終えた『地の糧』と『贗金つかい』を印刷しました。しかし、なんと印刷  
 刷、なんと用紙でしょう！ 本を手にとされたらお笑いになるでしょう。しかしこの  
 本もまた、私たちが過ごした過酷で恐ろしい年月の真の証人なのです。そして、これ  
 らの本があまり売れてはいないのをお伝えするのは恥づかしいこととは思いません。  
 何年もの間、数百部しか売れませんでした。しかしあなたご自身が、最初の著作群の  
 発表時には、フランスの大衆について同様の経験をされました。待つことを知る者に  
 はいずれしかるべき時が来る、そう私は確信しています。しかしここで興味深いこと

があります——かつて在重慶フランス大使館の文化アタッシュ（若いカトリック教徒で、パリの東洋言語学院の元学生）が私たちの大学を訪ねてきたとき、私は儀礼としてあなたのご本を数冊渡しました。驚いたことに、彼は困惑した表情でそれを眺め、「嗚呼、アンドレ・ジッド！」と言ったきり一言も発しませんでした。爾来、私は重慶のフランス大使館の職員のほとんどが×××〔ママ〕で、ジッド氏は彼らにとって大厄災であることを知ったのです。

私はまた、ご著作に大きな関心を抱いている誠実で聡明な読者が、我が国の若者のなかに決して少なくないことをお伝えできるのを大変嬉しく思います。彼らの大半は大学生ですが、残念ながら我が国ではあらゆるものが戦争で大きな打撃を受け、本を買う余裕がありません。これらの本を出して以来、私は若い学生たちからたくさんの手紙を受け取りました。私にもたらされた実利はほとんど何もありますが、それでも私はこれらの翻訳を誇りに思っています。翻訳とは別に、3本の長い論文を書きました——「アンドレ・ジッドにかんする試論」（戦時中に雑誌掲載）<sup>37)</sup>、「マルセル・ブルーストと『失われた時を求めて』」、「『新フランス評論』と現代フランス文学」（どちらも近々印刷予定）。帰国して以来、私がやったことはほとんどこれだけで、あまりにも僅かです。今は『ユリアンの旅』と『背徳者』を翻訳しています<sup>38)</sup>。

昨年、我々の大学は上海（以前のキャンパス）に戻り、私も戻りました。そして7年以上前にあなたが送ってくださった『日記』を返してもらえたのは、なんと嬉しいことだったでしょう。その日記は戦争中ずっと私の友人の手元に残っていたのですが、その友人は私が内地へ旅立って以来、私に送る手段を失っていたのです（自由中国と占領地との間の通信はすべて遮断されていたため）。

私の手紙はすでに長すぎますし、「私の拙いフランス語」が本当に耐え難いものだと承知しております。しかし、まだお話ししたいことがあります。1944年、私は友人からの手紙で、あなたが私のことを案じてくださっていることを知りました。私がどれほど心を動かされたか、想像がおつきでしょう。しかし当時はあなたに直接手紙を書く手段はなく、あなたの便りを届けてくれた人（連絡将校だと聞いています）の情報も得ることができませんでした。私が知っていたのは、あなたがアルジェリアに滞在し、『ラルシュ』誌を編集しているということだけでした<sup>39)</sup>。それ以来、重慶で時々入手していた雑誌『ホライズン』〔1942年5-6月号〕で、あなたの『架空会見記』の断章も読みました<sup>40)</sup>。でもそれだけでした。さて、親愛なる先生、あなたご自身について何かお教えください。とりわけお願いがあるのですが、『日記』以後に出版なさった本をプレゼントしていただけないでしょうか。一刻も早い入手を望んでいます。ご厚意に甘えすぎているようで恐縮ですが、さらにもうひとつお願いがございます。パリにいたとき、リュクサンブール書店（サン＝ミシェル大通り73番地）であなたの『全集』を予約購入していました。第15巻までは受け取りましたが、この最初の15巻に続刊が予定されていたことは知っています。もしすでに出ているのであれば、ブリュージュ・ヴェラム紙刷りの1099番（これは私が以前予約購読していたときの番号です）を取っておいっていただけないでしょうか。本来なら直接ガリマール社に手紙を

出すべきなのですが、現在フランと中国ドルの為替交換ができないため送金の手段がないのです。どうか第15巻以降の巻を入手できるよう、ご尽力をお願いいたします。上海のような大都市でも、フランス語の本を売っている本屋は一軒ありません。ご親切に対し前もってお礼申し上げます。私がお役に立てることがあれば何でもお申し付けいただければと。もしご関心がおありでしたら、お返しに私どもの新しい文芸出版物をお送りいたします。

お便りをお待ちしつつ、我々夫婦と4人の子ともども、あなたのご健康とご多幸をお祈りいたします。敬愛と忠信を込めて。

盛澄華

追伸。アンリ・トマ氏の近況をお知らせください。

私の住所――

中国／上海市江湾區／国立復旦大学／樓山莊12号／盛澄華

この手紙を受けて、<sup>ひとつき</sup>一月ほどのスイス滞在からパリに戻ったばかりのジッドは5月4日、交流再開の喜びを込めて早々と返書を送っている（ここから年内一杯は数通の書簡がほぼ定期的に遣り取りされる）。長い引用とはなるが、両書簡の照応を捉え易くするためにも、その主要部分を次に再掲しておこう<sup>41)</sup>――

再び見いだした親愛なる友

素晴らしい長文のお手紙をようやく一昨日、つまり私がパリに戻って2日目に拝受。[…]お手紙を拝読し、本当に感動しました。久しく待ち望んでいたあなたの便りをやっと受け取ったのですから！そして私は早速、心からの喜びをもってこの返書を<sup>あなた</sup>認めています。私はいつもあなたのことを想っているのです！さほど大きな望みは抱いていなかったとはいえ、東方からの便りは届いていないかと何度も確かめたものでした。そしてついにあなたを探し当てたのです。私には互いの音信が途絶えていたことを敗北とは考えられません。我々は長きにわたって耐え忍び、ついにその報償を獲得したのです。お手紙の日付は4月16日でしたので、この手紙も5月末までにはお手元に届くことと思います。あなたの報せは嬉しく拝受しましたが、次にお手紙をくださる時は、4人のお子様とご夫人（私の心からの挨拶を私に代わって彼らに伝えてください）の写真を何枚か送っていただきたい、もちろんあなた自身の写真も……。あなたのご努力はなんと驚嘆すべきものであることか！あなたによって（あなたの論文と翻訳をつうじて）遠い地に新たな友情を得たことは、私にとってこの上ない慰めとなります。何冊か近作（なかでも『テセウス』は一種の精神的遺言と見なすことができます）を進呈しようと思いますが、しかしご安心ください、私の『全集』（あなたのおっしゃるところの大型版）は15巻までしか出ていないので、あなたが持っておられるもので全てです。[…]

あなたのお手紙にある在重慶フランス大使館の文化アタッシェの事情についてはさほど驚いてはおりません。しかし、長年にわたり私の作品とその影響に対し無慈悲な

攻撃を繰り返したのち（クローデルは最近もなお然り）、多くのキリスト教徒が態度を変えました。そのなかのひとりポール・アルシャンボーは、最近一冊の著書〔『アンドレ・ジッドの人間性』〕を発表し、私の批評的著作を最上ランクに位置づけています。もちろん同書では彼もキリスト教徒の立場から私の罪科を定め、いわゆる私の「学説」の破綻と失敗を論じています。しかし僅かながらですが、賛同の智慧が途切れることなく滲み出はじめています<sup>42)</sup>……。〔…〕私はこの本と、まだ差し上げていなかったすべての拙著をあなたにお送りしたいと思います。明日発送の準備をしますが、「普通郵便」を使うと何日ほどお手元に届くのでしょうか。

色々な方面からの催促があり、今日はもうゆっくりとお話する時間がありません。しかし肝心なのは、我々が必ずや再会し、お互いこの友情に忠実たることです。この友情こそは私が心中とりわけ大切にしているもののなのです。

7月末には上海の盛澄華から新たな便りが届く。半月前に発信されたその書簡にはジッド著作の翻訳作業の様子や献本への謝意が綴られるとともに、彼が最近発表した論文に添えて、妻や子らとの家族写真数葉が同封されていた――

《書簡9》<sup>43)</sup>

〔上海〕江湾区、〔19〕47年7月15日〔火曜〕

親愛なる先生

5月4日付のお手紙は消印によれば5月25日に江湾到着、6月中旬に私の手元に届きましたが、あまりに強い感動と、自由に扱えぬフランス語で少しでも上手に書けるようにと焦る不器用さのせいで、お返事が信じられぬほど遅れたのだとお信じていただけのことと存じます。郵便の配達担当者は私の英語名を知らず、2週間以上も保管しており、私が手にしたのは、ようやく私が調べてからのことでした。（今度は彼に前もって知らせておきましたが、それでも念のため私の名前を中国語で記したラベルを数枚同封いたします。私にお手紙を下さるさいに、到着するや確実に受け取れるよう、そのうちの1枚を封筒にお貼りください。）しかし、あなたの励ましと愛情に満ちたお手紙をいただいたこと、なんと表現したらよいのでしょうか！ それは、私が偶然発見した1947年2月の『タウン&カントリー』誌の記事「文学的回想と現今の問題」を英語から翻訳していた矢先のことでした<sup>44)</sup>。『ホライズン』誌に掲載された『架空会見記』の断章を除けば、この数年間で最初に見つけたご高論ですが、大好きな記事です。パレスの話（彼が見せかけに使おうとしたバイロン全集にかんする話）には大笑いしましたが<sup>45)</sup>、フランス思想の対話について説明なさっているところが特に好きです。翻訳をしているさい、お手紙が目の前にあったので、あなたのお声が聞こえ、あなたの笑顔が見えたような気がいたしました。この記事が好きなので、翻訳しているのです。というのも、あなたとは遠く離れていますが、精神的には近い国民である我々にとっても良い教訓になると思うからです（あなたがご著作、特に『日記』のなかで折に触れて指摘なさったフランス人の弱点を我々はすべてを持っており、フランスの精髓にお認めになった長所を我が国の古典作家たちもまた身につけています。私はしばしば

中国人のメンタリティはフランス人のメンタリティと多くの類似点があり、日本人のそれはドイツ人のそれに非常に近いと確認してきました。しかし、この話はここで扱うには長すぎます)。

ボーン通りのガリマール書店気付でお送りした本がお手元に届いているか心配しています。また先頃『『新フランス評論』とフランス現代文学』にかんする拙稿が掲載された『文芸復興』誌をお送りしました<sup>46)</sup>。そのなかで私は、一方で(初号も含めた)1908年の創刊〔および翌年2月の再創刊〕から、ヴィシー政権下であなたが脱退を宣言した時期までの同誌の歴史をたどり、他方では、約30年にわたりそれが当時のフランス文学にどのように反応してきたか、またどのような意味であらゆる文学ジャンル(演劇・詩・批評とりわけ小説)の進展に貢献してきたかを示そうとしました。

この手紙と同時に、私と私の家族の写真数枚を普通便(書留)でお送りします。あなたのお写真を、たまたし可能であればカトリーヌ嬢のお写真もお送りいただければこの上ない幸せに存じます。お嬢様には我らが心よりのご挨拶を申し上げます。

最後になりましたが、このような寛大なご寄贈を賜り、感謝の言葉も見つかりません! 最初の小包には、『テセウス』『日記』、そして〔ポール・〕アルシャンボアの『アンドレ・ジッドの人間性』が入っていました。そして今日は『テセウス』『ママ』と『賈金つかい』が届きました。これらは生涯、あなたとの最も大切な思い出であり続けることでしょう。しかし私が何としても入手したい『架空会見記』を受け取っていないことに驚いております<sup>47)</sup>。そして私の貪欲さにご立腹でなければ、今ひとつお願いがあります。『女の学校』を1部ご寄贈いただけないでしょうか。この本は以前読んだことがあるのですが、私の持っている大型版『全集』には載っていません<sup>48)</sup>。ご高著のなかで最初に中国語に訳された本で、これまでにすでに3つの異なる版が存在しています<sup>49)</sup>。(私たちは外国の著者に翻訳の許可を求めない伝統があります。いったん中国に入れば、外国の食べ物はずべて皆のものになるようなものです)。すでに中国語に翻訳されたあなたの本をすべて探して、あなたにお送りしようと思います。しかし戦前に出版され、今は絶版になっているものは、すでに見つけることは不可能です。私が翻訳した『地の糧』『賈金つかい』『ジュヌヴィエーヴ』のほかには、『狭き門』『田園交響楽』『新しき糧』『放蕩息子』『ソヴィエト旅行記修正』『コンゴ紀行』、そして4つ〔正しくは5つ〕の「トレテ (traité)」があります<sup>50)</sup>。

アンリ・トマから連絡があれば、あるいは少なくとも彼の住所を知ることができれば嬉しく存じます。敬具

盛澄華

上海市江湾区 / 国立復旦大学 / 棲山荘 12 号

新たな便りに対してジッドは7月31日、十分な時間がないため取りあえずの返答だと断ったうえで、概ね以下のように述べている<sup>51)</sup>——。まずレパノンでの講演については「手元に数部ある珍しい版」を一部お送りするが<sup>52)</sup>、盛澄華がすでに英語訳から翻訳したということで、後追いの献本となったのは残念な

り。また『贗金つかい』『地の糧』『ジュヌヴィエーヴ』の中国語訳はすでに拝受、ただし『ジュヌヴィエーヴ』は『女の学校』『ロベール』との3部作であるだけに「それらと並置されておらず、その意義が明確には示されていない」。盛澄華の家族写真はまだ届いていないが、こちらからは自分の写真2枚を進呈しよう。なお娘カトリーヌはすでに結婚しており、今はジャン・ランベール夫人である<sup>53)</sup>。また『女の学校』は手元になく(重版中)、後日お届けするほかないが、まずはご所望の『架空会見記』(フランス版よりも収録テキスト数の多い、アルジェで出版された『……の故に』)をお送りする、と。

この書簡が上海に届くのは8月半ばのこと。盛澄華はジッドからの情報に応じて、その日のうちに次のような返書を認めている――

《書簡10》<sup>54)</sup>

NATIONAL FUH TAN UNIVERSITY (国立復旦大学)  
SHANGHAI, CHINA

[上海, 19] 47年8月17日〔日曜〕

親愛なる先生

7月31日付のお手紙がたった今私の手元に届きました。私の名前を中国語で表示してくださったおかげで、かなり時間が節約できたようです。そのなかにあなたの写真が2枚入っていたことは、私にとって何という喜びでしょう！ しかし「ジッド嬢」、現在のランベール夫人の年齢を混同していたとは、なんと愚かなことをしてしまったことか。私が初めて「[マドレーヌ・]ジッド夫人」の情報を知ったのは、シャルル・J・ロロとジャン・ド・セゲイが『アトランティック』誌〔の2月号〕に発表した記事によってであり<sup>55)</sup>、その後、あなたの『日記(1939-1942年)』[J2, 797, 1942年1月2日]を読み、〔お嬢様が受けておられた〕ダンスや歌、朗読のレッスンにかんする記述から、自分の最初の認識を正しいものと思い込み、誤った想像に陥ってしまったのです。また、あなたの正確な生年月日を暗記しているにもかかわらず、私の印象では、あなたはいつも年齢よりお若かったからです。早速ランベール夫妻に敬意を表し、お孫さんの祖父となられたあなたのご健康をお祈りいたします。

〔7月31日のお手紙で〕仰るように、3部作のひとつ『ジュヌヴィエーヴ』の拙訳に対するあなたの驚きにかんしては、『女の学校』と『ロベール』が先に置かれて初めてその意味が完全に成立しうるものです。事情は次のとおり。この最後の2作は当時手元にありませんでした。前回の手紙ですすでにご説明したように、『女の学校』には中国語版がすでに3点存在しており、そのなかには非常によくできていると思えるものが少なくともひとつあります。いずれにせよ、神のご加護があれば（と言っても私は信者ではないので、西洋人とは異なる見方であなたの作品を考察し受け入れることができますと信じています）このギャップは解消される可能性がありますし、あなたの本をすべて翻訳するという私の意図、長年抱いてきた意図もいつか叶うことでしょう。

我が国の大学のうち最も著名で最も設備の整った国立清華大学で教鞭を執るよう招聘されました。私は間もなく北平（旧首都北京）に向けて出発します。そのため以下に記す新しい住所にお便りをお送りください。ご寄贈（『架空会見記』など）の方をよろしくお願い申し上げます。間違いなく北平に転送してもらえます。次回はもっと長い手紙を差し上げたく存じます。新たなお手紙を北平で拝受できることを願っております。

私ども一家の感謝の念をお伝えし、ご多幸をお祈り申し上げます。敬具

盛澄華

私の新住所——

中国、北平市 / 国立清華大学 / 盛澄華

これに対するジッドの返書は10月3日パリからの発信。その主要な一節を次に引用すると——

親愛なる遠方の友

ほんの僅かな時間を利用してこの手紙を書いています。ひとつには、私が翻案・脚色したカフカ『審判』の戯曲版がちょうどリハーサル中のため、忙しくてどうにも手が回らないのです<sup>56)</sup>。2つ目には、急遽スイスに赴かねばならず（初演が終わり次第出発するつもりです）、当地で娘と合流する予定なのです。しかし、あなたの丁重なお手紙（8月17日付）と、あなたとご家族の写真とが私に喜びをもたらしたことを是非ともお伝えしたい。夫人はとても優しくさうだし、4人のお子様は皆とても可愛らしい。スイスで娘に何枚か（彼女、私、彼女の夫と3歳になるイザベルの）写真を撮らせ（私の手元にはろくな写真がないのです）あなたにお送りするつもりです。[…]

パリでは常に細々とした雑事に悩まされており、自分の意に沿う仕事ができずにいますが、スイス到着後は仕事が始められるでしょう（お手紙はヌーシャテルのイド・エ・カランド出版気付に願います<sup>57)</sup>）。

盛澄華は翌月、新任地の北平から長大な手紙を返し、日常の生活や大学教師の待遇悪化などを事細かに報告、また献本への謝意を表し、自身が訳したジッドの講演録を送付した旨を綴っている——

《書簡11》<sup>58)</sup>

国立清華大学 \* NATIONAL TSING HUA UNIVERSITY \* CHINA

〔北平、19〕47年11月10日〔月曜〕

親愛なる先生

この手紙はタイプライターで書いています。手紙の重さが郵便制限を超えない範囲で、手書きにするよりも少し長くお話しできるようにするためです。北平に来て2カ月以上になります。（上海からお送りの）私の最後の手紙に対するお返事を拝受していませんでしたので、ご多忙のはずだと思いましたが、ご健康かどうか気が遣われ、最初

はあなたのことをとても心配していました。すべて大丈夫だという言葉をどれほど望んでいましたか。ようやく 10 月 3 日付のお手紙が私の元に届きました。あなたに対して多くの恩義があり、何をお返しすればよいかわからない私にとっては、常にとっても感動的でとても有益なお手紙です。私はすでにそのお手紙をここ 2 週間何度も読み返し、鍵をかけて抽斗ひきだしのなかに仕舞っておきました。あなたがご家族と合流するため、そして何よりもより良いお仕事に戻るためにスイスへ旅立たれたと知り、嬉しく思います。それにしても何のお仕事でしょうか？ あれこれと憶測するばかりです。新しい小説ですか？（いいえ、そうは思いません）詩のアンソロジー？（『架空会見記』で語っておられたものはすでに出了のでしょうか？）あるいはなにか序文か批評的エッセイでしょうか？ 私の手紙がお仕事の合間にあなたのお目にとまり、お邪魔にならず、気晴らしとしてでもお役に立つならば幸甚に存じます。この手紙があなたにとって退屈なものであって欲しくないからです。15 分ほどお時間があれば、ご返信ください。あなたが私のことをお忘れにならぬことは分かっております。そしてあなたは私たちの間に——どんな性質のものであれ——繋がりを望んでおられただけに、私が読んだもの、私が感じたこと、私がしている仕事、そしてとりわけ、私があなたに何を負っているのかについて、つらつらと綴らせてくださいませ。

まず第一に、私はここで誰よりも幸せです。私は北平郊外にある大学で一人暮らしをしています。私の妻と子供たちは町の彼女の両親と一緒にいます。ほぼ 10 年間の家庭生活の後に得られた心地よい自由。私は家族のことをとても愛しています、それを疑うつもりはありませんが、私はこの孤独で本を読んだり、仕事をしたり、熟考したりすることを強く望んでいます。この大学は全国で最も設備の整った大学であることはすでに述べました。数平方キロメートルの面積を占めています。英国風庭園の趣です。この真珠母色の空の下、今は赤と金色に染まった森、丘、川が見えます。ここでは、どの場所も私の若い頃の思い出を蘇らせます。なぜならフランスに行く前に勉強したのもここであり、初めてあなた〔の作品〕を知ったのもここからです。アメリカ人の年配教授ロバート・ウィンター（現在 60 歳）は今も在職していますが、その彼が初めて私をラシーヌとジッドに導いてくれたのです<sup>59)</sup>。13 年前、私が『贗金つかい』についての学位論文を書いたのは彼の指導のもとでした。先日、私の論考や翻訳を持参すると、彼は大変驚いていました（とはいえ中国にどれだけ長く滞在していても、彼はほとんどすべての在住外国人と同じように中国語は読めないのですが）。

私は現在、週に 3 つの講義を持たねばなりません。それぞれ 3 時間です。そして私がここで教えているのはまさにフランス語とフランス文学だなどと、最高の師たるあなたに打ち明けるほどの勇氣はありません。残りの時間はすべて私のものですが、準備しなければならない講義、読まねばならぬ本の山、記事を書き翻訳をしなければならないので、あまり暇な時間はありません。フランスに何年も滞在しているあいだにフランス語をしっかりと勉強しなかったことを時々後悔します。実を言うと、ソルボンヌの授業の大半に興味を持てなかったからです。ドイツ語・イタリア語・ラテン語、そして本以外のもの、特に愛と人生に私は惹かれました。私はこの多様性と美的・心

理的複雑さの渦のなかに陥っていました。すべてを学び、すべてを把握したいと思っているのに、何も達成できません。これはまさに『地の糧』の著者が一時感じた精神状態です。憤慨したというか悔しくなった私は、ついにはすべてを放擲し我を忘れて旅をし始めましたのです……。それから私は所持金のすべてをあなたの『全集』の予約購読に注ぎ込みました。1年間、私はひたすらそれを読み続けました。なんとという陶醉、なんとという喜びだったでしょうか。1年後にすべてを読み終えたとき、不思議なことに、安堵感というか、芸術と人生のための人間に戻るという新たな力が湧いてきたのです。私は大学都市に引っ越し、同い年の若い女性と出会い、彼女と結婚し、仕事に戻ることに決めました。そこで戦争が勃発したのです……。パリでもっとよく学ばなかったことを後悔していると時々口にしますが、心の底ではそれほど後悔していません。ええ、多くの同胞と同じように、私もパリ大学の博士号を持って中国に帰国することもできたでしょうが、そうなればあなたにお会いする機会もなかったし、今の私ではなくなっていたでしょう。でももうやめましょう、もう十分にお話ししましたし、あなたも退屈なさるかも知れません。あなたから遠く離れたどこかに、あなたにとっても恩義があり、とても感謝している存在がいることを知っていただけるだけで十分です。

私は、純粋な商業都市で、とにかく騒がしい上海を離れ、古い思い出がたくさんある北平に来ることができて嬉しいと申し上げました。とりわけこの図書館が好きです。英語によるヨーロッパ文学の分野のすべての重要な作品に加えて、ヴィヨンからプルースト、ヴァレリーまで、かなりの数のフランス人作家の作品があって、打ち込むものがたくさんあることが分かります。実質的に日々の生活に変わりはありません。授業と稀にする散歩を除き、ほとんど外出しません。私は独房のなかで幸せにしています。読書と翻訳はできるかぎり活用したいと思っています。なぜなら、いつか私は決然とすべてを捨て、そして何よりもこの教職を捨てて私の唯一の野心である著作の執筆に没頭することになるでしょうから。しかしまだ待たねばならぬことは分かっています。それにはまだ機が熟していない、あるいは私自身もまだ熟していませんが、時間はあります。

あなたは中国を訪れたいと仰っておいでですが、すでに8年前の手紙で私にそのことについて話しておられましたね<sup>60)</sup>。それはあなたの夢ですが、私にとっても、あなたを歓迎し、あなたの通訳として役立つことは長年の夢です。まだその日は来るでしょうか？ あなたにとっても私にとってもそうなることを願っています。ですが、たしかに私たちが生きているこの時代ほど不運なものはありません。新聞を開くたびに、フランスではすべてがうまく秩序立っていないという印象を与えるニュースを見つめます。中国で起こっていることはさらに悪く、きわめてひどいと思っています。構いません。政治的紛争は内戦に発展し、日ごとに悪化し、特に長年にわたる戦闘と破壊の後には、経済危機が避けられない結果となります。戦前、アメリカ・ドルはわずか3中国ドルの価値しかありませんでしたが、今日の闇市場では10万ドルの価値があり、まともな食事には10万ドルが必要です。生活費は戦前の10万倍に跳ね上がっているのに、私たちの給料は7,000ドルのままです。戦前の大学教授は王様のような生

活ができましたが、今では大家族であれば米を買うのもやっとなです。まったく馬鹿げた話ですが、どうすればよいのでしょうか？ これも私が部屋に閉じこもることしかできない理由のひとつです。外に出れば、口を閉ざすことができず「……」と叫んで、首を刎ねられてしまいます。この状況を世界的なイデオロギーの対立（米国対ソ連邦など）のせいだと考え、この状況が存在するかぎり改善されないと信じている人たちがいます。おそらく彼らは正しいのですが、完全に正しいわけでもありません。私はこの国の腐敗と悪の大部分は国内にあると信じています。今でも何ら働きもせず、きわめて裕福で王様のような暮らしをしている人は少なくありません。にもかかわらず国民も知識人も苦しんでいるのです。何かが起こらねばなりませんし、遅かれ早かれそれは起こるでしょう。どうすればよいのか？ まさに社会問題です。

これはすべて多弁家気質ではない人間による多弁とお受け取りください。そして今、これまでのご寄贈に深く感謝させていただきます。私はご高著『……の故に』と「レバノン講演」を拝受しました<sup>61)</sup>。それから『アルシュ』誌4号分が入った小包（書店から送られてきました）。あなたからの定期購読特典の雑誌の場合は、書店に住所変更の連絡をお願い申し上げます。『フィガロ・リテレール』（週刊紙）も考えていることはご存じのとおり。こちらの方が安価です。私が飽くなき人間だと思いにしないのであれば、私用に予約購読していただけないでしょうか？ そうして下さることで、あなたは私にフランスの文壇で起こっていることを知らしめてくださるのです。私の方からは2週間前に、レバノン講演〔英語訳〕の中国語版が掲載された『文芸復興』（9月号）を（普通郵便で）送りました<sup>62)</sup>。〔フランス語〕原文を拝受したときには、私の原稿はすでに印刷に回っていたことを残念に存じます。

あなたがスイスから私に送ると言っておっしゃっている写真にどれほど感謝しているかを申し上げねばならないでしょうか。鶴首してお待ち申し上げます。

この手紙が運良くあなたのお誕生日に届くかどうかは分かりません。あなたにお土産を贈ることができず、私がどれほど悲しんでいるかをどうか知りおきください。ただそれは現時点ではほぼ不可能なのです。私のこのうえない想いをお受け容れいただきたく。敬具

盛澄華

追伸

1. 次の下線を引いた単語の意味をご教示ください（どんな水棲動物でしょうか）。多くの百科事典やフランス語大辞典を調べましたが、見つかりませんでした。

「……私たちは、こうした海底の妖夢のなかを泳いでみたいと思った。だが、蟹やシャトルイユ (*chatrouilles*) のことを思うと、泳ぐ気にもなれなかった」(『ユリアンの旅』[1929年 NRF 版] 68頁/『全集』第1巻313頁 [RRI, 201])。

2. Sheng は私の姓で、Cheng-hua は名です。私たちの習慣では名の前に姓を置くのです。

この長文書簡に対するジッドからの返信は遅れるが、盛澄華は12月に入ると

再び筆を執る。前月 13 日に発表された作家のノーベル文学賞受賞を言祝ぐためであった——

《書簡 12》<sup>63)</sup>

国立清华大学  
NATIONAL TSING HUA UNIVERSITY  
PEIPING, CHINA

〔北平〕, 1947 年 12 月 5 日〔金曜〕

親愛なる先生

「まず名誉が私を避けた。次いで今度は私が名誉を避けた……」〔『日記』, 1926 年 8 月 23 日〔J/2, 15〕〕とお書きになったあなたに、どれほど熱烈で深いものであっても、私の心から湧き出た祝意があなたに受け入れられるものたりうるのは分かりません。世界の隅々から多くの祝意が届くと思います。あなたに手紙（ヌーシャテル、エヴォル通り 15 番地、イド・エ・カランド社気付）を差し上げた直後ただただに、このニュースは私にとって突然のものでした。この 13 年間、あなたの作品を研究し翻訳してきましたので、あなたにどれだけ恩恵を賜ったのかを知ることができて嬉しく存じます。翌日には、私の友人である大手日刊紙（『益世報』）の（『フィガロ・リテレル』に類した）文学付録の編集者が、この機会に、あなたを中国の一般大衆に紹介する記事を書いて欲しいと言ってきました。そこで二日徹夜して、なんとか 15,000 語ほどの記事を書き上げました（本状に同封）<sup>64)</sup>。あなたとあなたの作品に対する私たちの敬意と愛の証としてそれをお受け取りいただきたく。中国作家協会の友人たちも、私を通してあなたに敬意を表したいと願っています。あなたからの一言があれば、彼らの誉れとなると確信していますが、ご多忙のことと存じますので、あなたにお話しできそうなことはすべて、別のさらに適切な機会まで取っておくことにいたしましょう。あなたの献身的なる

盛澄華

2 通の便りに応えずにいたジッドが、滞在先ヌーシャテルから返書を送るのは、年の瀬も迫る 12 月 23 日のこと。内容照応の便を考慮して、ここでもまたその全文を再掲することにしよう<sup>65)</sup> ——

親愛なる盛澄華

11 月 10 日付の素晴らしい長文のお手紙に返事を差し上げず日延べを繰り返していました。お手紙によって私はあなたの現在の暮らしについて詳しく知り、またお仕事の進捗具合を思い浮かべることができました。その後ノーベル賞という大きな榮譽を得たので、健康状態がさほど悪くなければ、スウェーデンに赴いていたでしょう（しかし近ごろ心臓が弱っているため、ヌーシャテルに留まらざるをえず——いつまでとなることやら——仕事もできないでいます）。そうこうするうち、新たに 12 月 5 日付のお手紙とあなたの長い論文をいただきましたが、〔論文の方は〕中国語が分からないのでまことに残念です。嗚呼！ あなたと手紙で長々と語り合いたいですが、私にはその体

力がありません。私はもはやこの中国歴遊の夢を諦めざるをえないのではないかと恐れています。まだ気力の満ち溢れているうちに機会を逃したことを深く後悔しています！彼の地であなたとの再会から得られたであろう喜びは、あなたに対する私の深い真実の友情に比例して大きくなったことでしょうに。私は我々が知り合っただけで、あなたのお手紙をすべて保存しており、あなたが私に示してくださる共感は今もなお生涯における最も大切なものです。あなたのご配慮によって若き学生諸君のなかに新たな友情を獲得できたことをどれほど私が感謝していることか。彼らにそのことを知り、理解してもらいたい。お子様たちを抱擁し、ご夫人には心よりの敬意を表します。敬具

アンドレ・ジッド

追伸——《chatrouille》という語は完全に私の造語であり<sup>66)</sup>、翻訳にさいしてはそのままにしておくか、「蛸 pieuvre (octopus)」または「ウニ oursin」に変えてください。

ジッドの応答から半年を経た翌年5月、盛澄華は長い沈黙を破り一筆を返している。記述内容から判断すれば、作家がこれに応えなかったとは考えにくいところだが、少なくとも今日存在が確認されるかぎりでは当該書簡が両者最後の遣り取りとなった——

《書簡13》<sup>67)</sup>

国立清华大学  
NATIONAL TSING HUA UNIVERSITY  
PEIPING, CHINA

〔北平〕, 1948年5月21日〔金曜〕

親愛なる先生

スイスから発信された1947年12月23日付のお手紙をたしかに拝受いたしました。長らく便りを差し上げておりませんでした（というのも、あまりあなたを煩わせてはならぬと考えて）、常々あなたのことを思っております。ご健康を完全に回復なさり、パリにお戻りのことと存じます。離れておりますと不安も増すもので、一言でも頂戴できれば安心なのですが。私のほうは翻訳の仕事が続いております。『ユリアンの旅』はまもなく訳し終わります。また『架空会見記』は隔週の連載物として中国の大きな日刊紙に発表中です<sup>68)</sup>。

我々の大学で資格を取得し復習教師を務めている友人の林<sup>リン</sup>氏が、ソルボンヌで学ぶため（専門は心理学）数日後にはフランスに向かいますが<sup>69)</sup>、私はこのまたとない機会を利用して、あなたにささやかなお土産を託けます。それは北平特産の青銅製の印章で、あなたのお名前が彫られています。蔵書印として書物に捺すものです。これがその印です〔続いて「紀徳」と刻した朱印が捺されている〕。〔印章を収めた〕函のなかの小さな窪みには特別なインク（植物性の油を混ぜた朱色の印泥）が盛られています。使い方は印面全体にインクが行き渡るよう十分に浸した後、本やお望みの紙に力強く捺してください。

この手紙には家族と私の写真数葉も添えます<sup>70)</sup>。上手く撮れてはいませんが、ほかにはましなものが手元にないので、致し方なくこれをお送りする次第。敬具

盛澄華

＊

以上、拙いながらも前稿に続きジッド＝盛澄華往復書簡の提示・紹介を試みた。順次別個にはあったが、それなりに資料体のほぼ全体像を示しただけに、あえて前稿の結びの一節を以下に掲げることで両稿ともどもの結語といたしたい<sup>71)</sup>。

はたして盛澄華はこの年の暮に上梓した著書『紀徳研究』をジッドに贈ったのか。また出版にあたって書簡の中国語訳を附載する許可を前もって得ていたのか。あるいはジッドがかつての不用意な失言を深く悔いた1943年10月の『日記』[1950年初出。註20参照]を目にすることはあったのか。そういった点をはじめ、1951年2月の作家死去までの期間、たとえ間接的にであれ何らかの接触の機会があったのか否かを断じうる資料は少なくとも現時点では確認されていない。

その一方、たとえば王聖思は父・<sup>ワンシヤンスー</sup>辛笛の親友、盛澄華を追想した文章のなかで、ジッドを信奉して止まなかったこの知識人が奇妙なことに50年代には「最も先頭に立ってジッドを否認する者となった」という作家・<sup>シュシュ</sup>徐訏の証言を引いている<sup>72)</sup>。兩次大戦間に「最重要の同時代人」と称された西欧の大作家が、没後は時代遅れの烙印を押され、急速に「煉獄入り」した事実を思えば、政治・社会体制の変貌著しい当時の中国にあってはさもありなんという気はするが、具体的な説明を欠いた寸評であるだけに、その正否を断ずるのもまた決して容易なことではなかろう。

かくのごとくジッドの最晩年・没後のいずれにおいても確定的な資料や証言の乏しさは否めぬものの、筆者としては彼と盛澄華の関係についてとりわけ受容史的な観点から今後も調査・探索を継続していきたい。

## 註

- 1) 拙稿「ジッドの盛澄華宛書簡」、『ステラ』第32号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2013年12月、261-292頁、及びこれに若干の修正を施し再掲した「ジッドの盛澄華宛書簡——中国人フランス文学者との交流——」、拙著『ジッドとその時

代』収載、九州大学出版会、2019年、463-500頁を参照。以下、本稿においては後者をもって引用・言及の対象とする。なお、盛澄華の中国語訳によるジッド書簡は次の著書に附録として併載されている（解題や註の類いは一切なし）——『紀徳研究』、森林出版社（上海）、1948年、389-404頁／増補新版『盛澄華談紀徳』、広西師範大学出版社（桂林）、2012年、231-243頁。

- 2) 前稿発表時点では、ジッド研究の第一人者クロード・マルタンがかつて個人的に作成していたカトリーヌ・ジッド女史旧蔵資料の分類カードに従い、盛澄華のジッド宛書簡は所在不明と記していたが（前掲拙著『ジッドとその時代』、491頁）、女史没後に設立された財団での調査・整理が進み、最近になって膨大な資料のひとつとしてその所蔵が公となった。筆者がこれら書簡群を参照しえたのは、財団を統括するピーター・シュニードル氏の厚意あるご配慮による。ここに記して同氏への深甚なる謝意を表する。
- 3) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide (Paris), cote K-01-b. なお、書簡の宛先住所は正確には「セバスチャン＝ボタン通り43番地」。ガリマールが1929年に社屋を移したボヌ通りは同年中にその一区画が名称変更されていた。
- 4) Voir Ramon FERNANDEZ, *André Gide*. Paris : Éd. R.-A. Corrêa, 1931 ; Léon PIERRE-QUINT, *André Gide. Sa vie, son œuvre*. Paris : Libr. Stock, 1932. 盛澄華の学生時代の小論「アンドレ・ジッド」（『安得列・紀徳』、『精華周刊』〔北京〕現代文学専号、1934年初出；『紀徳研究』、7-27頁／『盛澄華談紀徳』、1-12頁に再掲）はとりわけ後者に素材の多くを負っていた。
- 5) 以下、本文および註においてジッドの創作・『日記』を引用するさいには、ブレイアッド新版に依り、括弧内に各々該当巻の略号（RR1, RR2, J1, J2）と頁数を記して出所を示す——André GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*. Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009 ; *Journal, I (1887-1925) / II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY et Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996-1997.
- 6) 前掲拙著 467頁。
- 7) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide, cote K-01-c.
- 8) 前掲拙著 468頁。
- 9) 同上、468-472頁参照。
- 10) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide, cote Y-03-dq.
- 11) 「盛澄華はジッドが喪中であることをまだ知らない」という《書簡3》の内容を承知していなかったため、筆者は前掲拙著 473頁においてこの「心のこもった気遣い」をマドレーヌ逝去への愁傷の意と解していたが、これは明らかに失考であった。
- 12) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide, cote K-01-d.
- 13) 1918年10月13日の『日記』[J1, 1072]。同年4月25日[J1, 1064]や1938年8月25日[J2, 615]にも同様の旨が記されている。

- 14) «Euvres complètes de Frédéric Nietzsche publiées sous la direction de Henri Albert» の総題のもと、19 世紀末よりメルキュール・ド・フランスから刊行されたニーチェの著作群（巻数表示なし）。そのうちアンリ・アルベール自身のフランス語訳によるものは『ツァラトゥストラはかく語りき』（1898 年刊）をはじめ 11 作品（14 巻）。なお「ジッドとニーチェ」を論じた研究については以下の包括的書誌を検索・参照—— George PISTORIUS, *André Gide und Deutschland. Eine internationale Bibliographie*, Heidelberg: Carl Winter, Universitätsverlag, 1990.
- 15) 前掲拙著 474 頁。
- 16) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide, cote K-01-f.
- 17) この『田園交響楽』日本映画化をめぐる詳細については、前掲拙著 476-478 頁・495-496 頁（註 15-18）を参照。
- 18) この日本語版『ジッド全集』とは 1934 年から翌年にかけて刊行・配本された建設社版（全 12 巻）のこと。日本側の序文依頼に対する作家の逡巡と婉曲な拒否をめぐる詳細については、前掲拙著 480-481 頁・497-498 頁（註 21-22）を参照。
- 19) この盛澄華宛の全文は同上 479-480 頁を参照。
- 20) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide, cote K-01-d. ジッドの先便とこの書簡によって無事収まりはしたものの、一件は大きな悔いとしてジッドの記憶に永く残ったことは付言しておかねばなるまい。4 年半後（1943 年 10 月）の『日記』は、なおも消えぬ心の痛みを次のように語っている——「この数日、盛澄華のことをよく考える。そのたびに最後に会った後、彼を残酷にも傷つけたに違いないあの不器用で愚かしい言葉が思い出され胸が痛む。自分でもまるで分からない。そしてそこには悪意も底意もない。もちろん私の心からは遙かに遠いあの言葉を彼はどのように解釈しえたのだろうか……。/[...] 彼は結婚した旨を知らせにやって来て、遠い故国に帰る前に若い妻を私に紹介したいと語った。何を勘違いしたのだろう、何を戸惑ったのだろう、何たる言葉を口走ったのだろう。私はその時、「もちろん日本の女性と結婚なさったのでしょうか？」と尋ねた。私は、彼の表情がいきなり変わり、微笑が消え、唇が震えるのを見た。彼は口ごもりながら言った。「日本の女性ですって！…… おお！ ジッドさん、どうしてそんなことを……」。取り返しがつかなかった。私にはこの場違いな言葉を取り消すことはできなかった。説明したり言い訳したりしてみたが無駄だった。当時私は『田園交響楽』を映画化した大勢の日本人と頻繁に会っていた。そんなことからおそらくこうした突然の許しがたい混同が生じたのだ。すぐに私は、我々のあいだに生まれかかった友情、彼のほうから心よりの信頼を寄せている友情に、おそらく致命的な打撃を与えたことに気がついた。そして今日もまだ、そうした自分のことを許しがたく思っている。/彼はいったいどうなっただろう？ 再び会うことがあるだろうか？ 私がこれを書いているのは、いつかこれが彼の目にとまり、彼の思い出は私の心のなかで変わることなく芳香を放っていると知ってもらいたいためなのだ」（J2, 970-971. 1950 年刊の『日記（1942-1949 年）』に初出）。

- 21) ジッドはこの年の1月26日、マルセイユから同国に向けて出航し、30日にカイロ、2月3日にルクソールに到着。同月中旬のナグ・ハマディへの小旅行をはさんで、3月16日までルクソールに逗留。同地を発って数日間アレクサンドリアに滞在した後、アテネなどギリシャ各地を訪問、パリには4月17日に帰着していた。
- 22) 『地の糧』の中国語訳については後註36を参照。
- 23) 《書簡5》で『日記』は話題に挙がっておらず、1年前にその寄贈を願ったという記述はおそらく盛澄華の勘違い。プレイアッド版が<sup>しゅったい</sup>出来るのはこの年の6月末のことで、彼は同版を11月に上海で受領することになる。《書簡6》《7 bis》も参照。
- 24) ジッドの1938年11月24日付アンリ・トマ宛未刊書簡、個人蔵。
- 25) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide, cote K-01-g.
- 26) 総動員は9月2日(翌日、対独宣戦布告)。当時ジッドは偶々南仏に滞在中であった。
- 27) 書簡全文は前掲拙著481-482頁を参照。
- 28) しかしながら後年ジッドは体力・気力の衰えゆえに、この中国訪問の願いをほぼ不可能視ようになる。本稿83-84頁に再掲した1947年12月23日付盛澄華宛を参照。
- 29) 存命作家の作品として初めてプレイアッド叢書入りしたジッドの『日記(1889-1939年)』初版6,000部(1939年5月20日印刷了)は異例の売れ行きを見せ、年内には早くも品切れとなっていた。叢書入りの経緯や初版以降の各版にかんしては、前掲拙著501-514頁収載の「ジッドと『プレイアッド叢書』——『日記』旧版をめぐる」を参照されたい。
- 30) Lettre dactylographiée signée de Wu Ning Kun à Gide, Fondation Catherine Gide, cote K-01-m. 巫寧坤(1920-2019)は著名な翻訳家で、英米文学の研究者。1943年に渡米、この当時はインディアナ州のマンチェスター大学に在学中であった。1948年3月同大学を卒業、続いて博士号取得のためシカゴ大学に入学する。
- 31) 「憶紀徳」, 『時与潮文芸』(重慶)第1巻・第1期, 1943年3月, 150-152頁。『「地糧」訳序』の題名で『紀徳研究』, 29-39頁 / 『盛澄華談紀徳』, 13-18頁に再掲。
- 32) 本段落に挙がる翻訳の書誌情報は後註50を参照。
- 33) ジッドによる『ハムレット』フランス語訳は、まず第1幕のそれが文芸紙『エシャンジュ』の創刊号(1929年12月)に初出、翌年には単行版がパリのラ・トルチュ出版から刊出していた。全訳は1944年にニューヨークのパンテオン・ブックス(英仏両語版)、次いで1946年にガリマールから出来する。舞台初演はジャン＝ルイ・バローの演出のもと、同年10月17日パリのマリニー座でおこなわれ、好評を博したところであった。なお、この上演をはじめとしてジッドがバローと交わした遣り取りについては次を参照——«André Gide et Jean-Louis Barrault : *Correspondance inédite (1935-1950)*» présentée par Jean CLAUDE, *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 126/127, avril-juillet 2000, pp. 233-288.
- 34) jijつ当該書簡(保存・所在は未確認)は盛澄華が中国語に訳出したジッドの書簡群のなかには見当たらない。
- 35) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide, cote K-01-h.

- 36) これらの中国語訳を訳題とともに刊年順に記せば——『地糧』, 新生図書文具公司 (重慶), 1943 年; 『偽幣製造者』, 文化生活出版社 (重慶), 1945 年; 『日尼微』, 文化生活出版社 (上海・重慶), 1946 年。
- 37) 「試論紀徳」, 『時与潮文芸』(重慶) 第 4 卷・第 5 期, 1945 年 1 月, 1-17 頁。『紀徳研究』, 41-158 頁 / 『盛澄華談紀徳』, 19-95 頁に再掲。
- 38) 盛澄華の 1948 年 5 月 21 日付ジッド宛書簡 (本稿 84 頁) には, まもなく『ユリアンの旅』を訳し終わる旨が記されているが, 『背徳者』の中国語訳とともににはたして出版・紙誌掲載されたのかどうかは残念ながら不詳。
- 39) ド・ゴール将軍の祝福のもと, 出版業者エドモン・シャルロの支援を受けたジッドは 1944 年 2 月, 前年 5 月以来の滞在先アルジェで友人ジャン・アムルーシュと『ラルシュ』誌を創刊していた (カミュやモーリス・ブランショらも参加。初めは同地で, 次いでパリで 1946 年 5 月までに計 26 号を発行)。アムルーシュは同誌を休刊中の『新フランス評論』の後継にせんと強く願っていたが, いっぽうジッドにとってはあくまでも後者復刊までの一時的な代替誌にすぎなかった。Voir André GIDE - Jean AMROUCHE, *Correspondance (1928-1950)*. Édition établie par Pierre MASSON et Guy DEGAS, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 2010 ; Pierre MASSON, *Gide et Charlot*, Pézenas : Éd. Domens, 2018.
- 40) Voir André GIDE, « Imaginary Interviews » (translated by Peter WATSON), *Horizon* (London), vol. V, n° 29, May 1942, pp. 316-330 / n° 30, June 1942, pp. 400-417. 当該記事は 1941 年 11 月 11 日から翌年 1 月 10 日にかけて『フィガロ』紙に連載された「架空会見記」のフランス語テキストを英語訳で転載したもの。フランス語原文はこの翌年, 『……の故に (*Attendu que...*)』(Alger : Charlot) および『架空会見記』の 3 つの版 (後註 47 参照) に収録される。
- 41) 書簡の全文は前掲拙著 484-485 頁を参照。
- 42) Paul ARCHAMBAULT, *Humanité d'André Gide*, Paris : Bloud et Gay, 1946. ジッドは著者からの献本に対する礼状 (1946 年 9 月 25 日付) においてばかりか, 他の第 3 者宛の書簡でも同著を高く評価していた。たとえば翌月 7 日にはコロンビア大学教授ジャスティン・オブライエンに宛てて次のように書いている——「断固たるカトリック的観点と, それに発する少なからぬ指弾にもかかわらず, [この本は] 全き善意にもとづく最良書, 批判は不可避免的に含むにせよ, 共感に溢れた最良書のひとつです」(André GIDE - Justin O'BRIEN, *Correspondance (1937-1951)*. Édition établie, présentée et annotée par Jacqueline MORTON, Lyon : Centre d'Études Gidiennes, 1979, p. 20)。なお, 作家と批評家との具体的な遣り取りについては次の拙稿を参照されたい——「アンドレ・ジッド=ポール・アルシャンボー往復書簡——『アンドレ・ジッドの人間性』をめぐって」, 『ステラ』第 40 号, 2021 年 12 月, 235-244 頁。
- 43) Lettre autographe signée, Fondation Catherine Gide, cote K-01-1. Destinataire (enveloppe conservée) : *Monsieur André Gide / [I<sup>bis</sup>, rue Vaneau / Paris (VII<sup>e</sup>), France]* <Château d'Écharcon / par Mennecy / Seine et Oise>.

- 44) 『文学的回想と現今の問題 (Souvenirs littéraires et problèmes actuels)』は、ジッドが1946年4月1日にラジオ＝レバノンの放送で、次いで同月12日にベイルート市内の映画館ロキシ座でおこなった講演。フランス語版テキストはまもなく同地の「レ・レットル・フランセーズ」から刊出していたが(同年5月31日刷了)、いまだこれを入手していない盛澄華が中国語訳にさいして用いた英語訳の出典は次のとおり—— André GIDE, «Literary Recollections & Current Problems» (translated by J. S. PENFOLD), *Town & Country* (New York), Vol. 101, No. 4293, February 1947, pp. 95-99, 180. また当該の中国語版はこの書簡の翌々月に「文壇追憶与当然問題」の訳題で上海の『文芸復興』誌(第4巻・第1期, 1947年9月, 58-65頁)に掲載される。
- 45) まだほとんど交流のなかった頃、招きを受けてパレス宅を訪れた折りの記憶をジッドは次のように述べていた——「このことだけははっきりと覚えている。巨匠〔パレス〕が私を迎える準備の整うまで玄関のような所で待たねばならなかったが、私はその小部屋に設えられた書棚にとっても綺麗な装丁本が並んでいるのに感心していた。しかるにパレスはほとんど本を読まないという評判が立っており、自らもそのことを公言していたのだが。目の前にバイロンの『全集』があったので、私は無造作にその一冊を手前に引いた。すると全集すべてが一挙に揺れ動いたのだ。これらは偽物の本で、抽斗用の見せかけ、うわべの外装であり、(私はすぐに閉めたが)中にはブラシや香水の瓶が入っていたのである」(前掲の『文学的回想と現今の問題』英語訳, 97頁; 前註44のフランス語初版, 33-34頁)。
- 46) 「『新仏蘭西雑誌』与法国現代文学」, 『文芸復興』(上海), 第3巻・第3期, 1947年5月, 302-328頁。初出題中の「雑誌」を「評論」に変えて『紀徳研究』, 159-253頁/『盛澄華談紀徳』, 96-150頁に再掲。
- 47) 『架空会見記』の単行版は1943年に次の3点が公刊されたが、盛澄華が言及しているのは明らかにガリマール社版のこと—— André GIDE, *Interviews imaginaires*, Paris: Gallimard, 1943; *Interviews imaginaires*, Yverdon et Lausanne: Éd. du Haut Pays, 1943; *Interviews imaginaires. La délivrance de Tunis; pages de Journal, mai 1943*, New York: Pantheon Books, Inc., distributed by Jacques Schiffrin & Co, 1943.
- 48) ジッドの返信にもあるように、『女の学校』(1929年初版)は、大戦勃発のために第15巻(1939年)で刊行が途絶した NRF 版『ジッド全集』には収録されずに終わった。
- 49) 『女の学校』の中国語訳は実際には3つの訳題で計4点が出版されている(出版地は上海以外のみを記載。次註も同様)——『少女的夢』(王了一訳), 開明書店, 1931年;『少女的夢』(滕光天訳), 同化印書館, 1942年;『婦人学校』(陳占元訳), 明日社(桂林), 1944年;『女性的風格』(金満成訳), 作家書屋, 1944年。
- 50) 盛澄華による中国語訳の書誌情報については前註36を参照。また他の翻訳については引用順に——『窄門』(卞之琳訳), 文化生活出版社, 1936年;『田園交響楽』(麗尼訳), 美術生活社, 1935年(及び文化生活出版社, 1936年)/『田園交響楽』(施宣

華訳), 啓明書局, 1938 年 / 『牧歌交響楽』(木天訳), 北新書局(北京), 1936 年; 『新的糧食』(卞之琳訳), 明日社(桂林), 1943 年; 『浪子回家』(卞之琳訳), 文化生活出版社, 1936 年; 『從蘇連帰来』(林伊文訳), 亜東図書館, 1937 年; 『岡果旅行』(綺紋訳), 長風書店, 1940 年。『5つのトレテ』(『ナルシス論』『愛の試み』『エル・ハジ』『フィロクテテス』『バテシバ』, 訳題は順に『納蕤思解説』『恋愛試験』『愛爾・阿虔』『菲洛克但德』『白莎佩』)は合冊本『浪子回家集』(卞之琳訳), 文化生活出版社, 1947 年に収載。

- 51) 書簡の全文は前掲拙著 486-487 頁を参照。
- 52) 「珍しい版」とは, おそらくはレバノン・ペイルートでの講演録(前註 44 参照)を基に半分ほどの量にまとめた非売版テキスト『ペルティサウでの談話』(André GIDE, *Allocution prononcée à Pertisau le 18 août 1946*, s. l.: Imprimerie nationale de France en Autriche, [1946]) のこと。
- 53) ジッド唯一の実子カトリーヌは 1945 年 8 月から 1950 年代半ばまで作家・翻訳家のジャン・ランベールと婚姻関係にあった。
- 54) *Lettre autographe signée* (sur papier à en-tête de la «National Fuh Tan University»), Fondation Catherine Gide, cote K-01-j.
- 55) Voir Charles J. ROLO - Jean de SÉGUEY, «André Gide», *The Atlantic Monthly* (Boston), February 1947, pp. 115-119. 盛澄華が言及しているのは次の記述——「1938 年にジッド夫人が亡くなったとき, 女性に無関心だったとされるジッドは, 誰もが気づいていなかった男女関係から生まれ成長した娘の存在を公に認めて皆を驚かせた」(117 頁)。
- 56) カフカの小説を基にしたジッド, ジャン＝ルイ・バロー共作の戯曲『審判』は同年 10 月 10 日, ルノー＝バロー劇団によってパリのマリニー座で初演。ガリマールの初版テキストは 11 月 30 日に刷了, その後まもなく出来。
- 57) イド・エ・カランドは, 丁寧・緻密な編集にくわえ, マチスやモーリス・ブリアンション, デュノワイエ・ド・スゴンザックらの挿絵・肖像画を配した瀟灑な印刷・造本のゆえに晩年のジッドがとりわけ最良にした版元。ジッドは同社の活動に参画したりリチャール・エイドと職業上の肩書をこえた親交を結び, 1946 年とこの年の 2 度にわたってヌーシャテルを訪れ, 彼の自宅に長逗留していた。両者の交流にかんしては以下を参照—— *André Gide et son éditeur suisse. Correspondance avec Richard Heyd (1930-1950)*. Édition établie et présentée par Pierre MASSON et Peter SCHNYDER, Paris: Gallimard, coll. «Les Cahiers de la NRF», 2022; 拙稿「ジッドのリチャール・エイド宛未刊書簡」, 『ステラ』第 41 号, 2022 年 12 月, 65-74 頁。
- 58) *Lettre dactylographiée* (sur papier à en-tête de la «National Tsing Hua University»), Fondation Catherine Gide, cote K-01-k.
- 59) ロバート・ウィンター (Robert Winter, 1887-1987) は 1923 年以降, 永年にわたり東南大学・精華大学・北京大学などで英語・ロマンス語教授の職にあった。共産党政権下も中国に残り教鞭を執った唯一のアメリカ人として知られる。盛澄華はその

著書『紀徳研究』を「私をフランス現代文学の道に導いてくださった最初の恩師」として同者に献じている。

- 60) 本稿 71 頁に再掲した 1939 年 11 月 28 日付盛澄華宛を参照。
- 61) 「レバノン講演」のフランス語原文については前註 44 を参照。
- 62) 盛澄華による中国語訳の出版は前註 44 を参照。
- 63) Lettre autographe signée (sur papier à en-tête de la «National Tsing Hua University»), Fondation Catherine Gide, cote K-01-j.
- 64) 上海の『中国作家』(第 1 巻・第 2 期, 1948 年 1 月, 5-14 頁)と北京の『益世報・文学周刊』(第 68 期)に同時発表された「アンドレ・ジッド」(「安德烈・紀徳」)のこと。「1947 年度ノーベル文学賞受賞者ジッドの紹介」(「紹介 1947 年諾貝爾文学賞爾得主紀徳」)の題名で『紀徳研究』, 335-368 頁/『盛澄華談紀徳』, 200-220 頁に再掲。
- 65) 前掲拙著 491-492 頁。
- 66) ジッド自身の証言があるだけにその当否は確認しがたいが、『ユリアンの旅』の校訂版を作成したジャン＝ミシェル・ヴィットマンは当該語について次のように注記している——「ヤツメウナギの淡水棲幼生を指す動物学用語 «chatouille» との(意図的な?)混同」(André GIDE, *Le Voyage d'Urien*, éd. critique présentée par Jean-Michel WITTMANN, Tupin-et-Semons: Centre d'Études Gidiennes, 2001, p. 81, n. 1 [note reprise in *RR1*, 1282, n. 27])。
- 67) Lettre autographe signée (sur papier à en-tête de la «National Tsing Hua University»), conservée à la Bibliothèque littéraire Jacques Doucet (Paris), cote y 422-1. 日本語訳初出は前掲拙著 491-492 頁を参照。
- 68) 盛澄華の『ユリアンの旅』訳については前註 38 を参照。『架空会見記』の訳題・掲載紙については残念ながら不詳。
- 69) この精華大学復習教師「林」について委細は不詳。
- 70) ドゥーセ文庫所蔵のこの書簡には、盛澄華とその家族(妻と 4 人の男児)を撮った小型のスナップ写真 7 葉が添えられている。写真はいかにも円満な家庭の様子を窺わせるもので、じっさい夫妻はその後にもうひとり子を授かるが、どのような事情によるのか、1950 年代半ばに離婚するに至る。妻の韓恵連とも親しく接していた王辛笛<sup>ワンシンディ</sup>はこの「理想的な伴侶」との離縁を嘆き、後には盛澄華を難詰することさえあったという(王聖思の回想記「父・辛笛とその親友・盛澄華」、『盛澄華談紀徳』収載, 268 頁参照)。離婚後、韓恵連はフランス語系の教授職を務めながら独力で子供たちを育てあげた。いっぽう盛澄華は 1960 年代に再婚し、少なくとも一子をもうけている。
- 71) 次の 2 段落は概ね前掲拙著 493 頁からの再掲。
- 72) 王聖思の回想記(前註 70 参照), 258 頁。この引用の出所は示されていないが、徐訏は北京大学哲学系の出身で、パリ留学中に盛澄華と親しく交わった人物。

〔付記〕本稿において中国語の表記は繁体字・簡体字ともに国語新字体に改めている。